

こうほう ショッキング

Vol.41

Kōhō shocking

こめ だい き
米田大器さん



プロフィール

36歳。峰町佐賀出身、三根在住。ご実家は佐賀の圓通寺。3人兄妹の長男として生まれる。対馬高校卒業後、駒沢短期大学仏教科に進学。曹洞宗の総本山である福井県の永平寺などで修行。社会経験を積むためにアルバイト生活も経験。25歳で帰郷し、曹洞宗峰照寺住職に。奥さまと2女の4人家族。

「生まれた土地を離れる人も多くなっただけで、いつまでも故郷は変わりません。お寺に参ることで故郷を思い出してほしいです」

お寺って「亡くなつてからお付き合いが始まる」というイメージなんですが、お寺や住職の立ち位置をどのようにお考えですか？

お寺は、いつ誰が来ても誰かがいて、何か不安なことや誰にも話せないことをちょっと話してたら少し楽になった」という場所。住職はそのお話を聞くことができる立場であられたらと思います。そのため、門を広く開けてもつとお寺に足を運んでいただけたら、お檀家さんと共に考えていかなければいけないと思いますね。

お寺は亡くなった人のため、というよりも今生きている人のためにあるというのが一番です。葬儀は亡くなった人のためでもあり、亡くなった人を送る人の気持ちが無くなるためと考えると考えています。亡くなった人のためにはお経というものはそんなにないんですよ。お経とは生き方を説いているものなので、生きていく人が中心になります。生き方を説くお経を読んだり唱えたりする功德を供養にするわけで、一生懸命教えるに従って生きていく姿や行為が先祖への供養につながるという風に考えるのが一番だと思います。よく、「和尚さんにお経をあげてもらっただけで安心します」とおっしゃる方がいらっしやいますが、本来はちよつと違うのかな。

ご先祖様は、誰よりも家族に拜んでもらいたいと思うでしょう。和尚である私は、そのサポートをするという形ですよ、きつと。日本人は「神様仏様」と、お参りするものが多いですよ。

お寺は暗い寂しい出来事をする所で、明るいお祭り行事は神社で、という雰囲気があるんですが、神社ですることはお寺でもできるんですよ。結婚式も仏前式という形式があります。両家のお位牌の前で先祖様に報告するという形なんです。分かりますよ、いいなあと。思います。赤ちゃんが生まれた時、お宮参りと同じようにお寺参りもあります。どちらも大切にしたいです（笑）。お寺も神社も、ふと立ち寄り過ぎてほしい心のよりどころ。であるところは同じで、「感謝」の思いが繋がって行く場所だと思います。仏教にも宗派がたくさんありますが、切り口が違っただけで同じものを見ているんじゃないかなと思いますね。

最近さまざまな場所で、童謡詩人の金子みすゞさんの詩がよく用いられますよね。

彼女の時代は、日常の中に信仰が普通にあつたと思うんです。例えば「いただき物は先に仏壇にお供えて、感謝したあとにいただく」というのが宗教としてはな

く、「あたりまえの生活の流れ」だったわけですよ。あたりまえの生活の流れを、小さい子どもがお寺に来て鐘に興味を持ったり、ろうそくに火をつけて線香を立てたがったときのタイミンで教えてあげるといいのかな、と。檀家さんのお宅に行ったときに、小さい子どもが自宅用の小さい鐘をチンチン叩いているので、「お寺に来たら大きいのがあるけん、叩きにこね」って言うんです（笑）。

お寺に来ると本堂が広いので、子どもは走って回りたくなるんですよ。神社もお寺も子どもにとっては遊び場であつたり、ひと時の休息を得たい人にとっては落ち着ける場であつたりと、それぞれの日常の中にお寺という場所があつてくれたら。

お寺という雰囲気も、今あるものから少しずつ変わっていかなくてはいけないと思いますね。急激にはなく、気長に少しずつ。お寺は私だけではなく次に誰かが住職になって、ずっと繋がっていくものなので、そのような思いも育んでいけたらと思います。

毎回、登場してくださった方に次の方をご紹介いただくコーナー。次回は峰町佐賀にお住まいの沖津和彦さんです。お楽しみに。